

子ども・学校・地域を串刺しにした教育課程づくりで豊かな学力の保障を

大 口 久 克

はじめに

各報告がなされる前に、司会から昨年の分科会の討議の様子が次のように簡潔に述べられた。

教育課程づくりとは、教科のみならず、教科外を含む教育活動の全体計画づくりである。それは単なる時数合わせの形式的な計画ではなく、地域や子ども達の実態から出発し、地域や子ども達の願いに応えるものでなくてはならない。

そのためには、子ども論・子どもの発達論・授業論・学校論等の本質論議を各学校で旺盛に展開する必要がある。

そのことが強制と競争を原理にした学びから大きく脱却する教育課程づくりへの道筋をつくりだすのではないか。

レポートの概要と討議の様子

報告1 「教え込み」を乗り越える高校英語授業の実際

北見北斗高校 徳長 誠一

〈概要〉

小中学校の授業と高校の授業の形態の違いを紹介し、小中学校から学べき点を指摘しながら、「わかりやすい授業」よりも「わかりたくなる授業」とすべきであることを紹介。とりわけ、教師が教えすぎると生徒は学ばなくなると高校の英語の授業での実際を示していた。

〈討議の様子〉

「英語」で何を教えようとしているのか、何を教えたいのかをはっきりさせれば「教え込み」から脱却できる英語教育に転換できるのではないか。

高校でのこの報告が示すように、大学の学生も講義形式の一斉授業の形態だけではついてこない。討論などを通して主体的に授業に参加できたときに学生は生き生きとする

ものである。教師が学ばせようとすればするほど、子ども達が学びから遠ざかってしまうという現実も一方ではある。知的関心をどう持たせるかが大切な視点である。

全ての教師が同じようなやり方（授業形態等）にはならないのではないか。教えることを中心にすることと活動を中心にする。そのバランスをどう取るかが大切である。

報告2 生徒会活動を教育課程と学校づくりに位置づ

かせるために

富良野高校 松代 峰明

〈概要〉

高校における「教育課程」では、各教科の教育内容と配当時間のみに議論が終了してしまう現状がある。生徒会活動そのものも「教育課程」に反映させるために教育課程委員会のメンバーに生徒会担当者も加わることになった。生徒会活動の意義と目的を教職員全体で確認するための文書をもとに議論し、学校祭を前にLHRをどのようにすすめるかの実施要領も作成しながら各教員が学級討議をやりやすいよう手助けをした。

〈討議の様子〉

服装等の違反について、生徒が点検活動をしなからル

ルに反している者に対してクラスで取り組むことになった。このことは三者協議会（PST協議会）での議題の一つとなり、自由だからといって何をやってもいいというわけではないということが議論されたり、ルールそのものを三者協議会が検証していったことは有益であった。

若手の生徒会担当者を教育課程検討委員にすえたことは、生徒の人格形成に資する教育課程を高校現場においてどのように形づくっていくかという議論をともにすることになり、職場全体で青年教職員を育てることになったのではない。

報告3 教育課程づくりで考えてほしいこと

室蘭清水丘高校 國田 昌男

〈概要〉

教育課程Ⅱ教育課程表と理解している人への議論の投げかけとして、教育課程委員長として教育課程委員会に提出したものを示し、そのときの議論の様子や到達点を報告。普通科と英語科があった清水丘高校が単位制高校になった経緯と、単位制を導入することになったからの、学習の系統性と生徒の意欲から発した学びのバランスをどうしたらよいかについての議論の様子を紹介。

〈討議の様子〉

高校をランク付けするわけではないが、1位が普通科(SH、医進系)、2位が単位制、3位が総合学科という格付けとなっていることは現実の一面を示してはいないか。

定数の問題もある。単位制では5間口で7人の加配。総合学科では5間口では7人+1人の加配となる。少子化の中で間口が確保できなければ定数減となり、開講する授業の数が必然的に減少し、教育課程の大幅な変更が迫られることになってしまふ。

教育課程を編成する際、「特色のある」学校づくりをとるよりも、「普通の」普通高を目ざすことを心がけてきた。

〈高校の報告に対する共同研究者のまとめ〉

徳長報告からは、一方的な教え込みではなく、間違いや試行錯誤が豊かに保障される議論を大切にした授業の大切さについて改めて提起された。

真理に到達するプロセスこそ大切に、教えようとすることを絞り込みながら何のために何を教えるかに大きな関心を寄せることが重要である。

単位制高校の実態の詳細を示した國田報告では、学習集団と生活集団が同じ方が学びを深めるためには有効である

ことが指摘された。習熟度別の形態では功を奏さないのである。

かつて経験主義と系統性重視が対立的に議論されたことがあるが、カリキュラムの系統性と子ども達の興味関心から端を発した学びをどう結びつけるかの検討が一層重要となってきた。

LHRをどのように進めるかのシナリオをも作ったとの松代報告。「自主・自律」を生徒会でどう育てるかが鍵となる。「生きる力」に目的語がない。「時代を切り拓く」とすべきではないかと考える。そのためには批判的視点を持つことが大切である。

報告4 学校がサリバン先生になるために

|| 提言 内申点を入試に使うな ||

俱知安学習塾経営 長尾 靖友

〈概要〉

昨年と同趣旨の報告。この30年くらいで子どもたちの学力はかなりの落ち込みを示している。それには各家庭でのテレビの普及の相関を指摘せざるを得ない。また、高校に入試において内申点が導入されたことから、子どもたちと教員の関係が歪になり、そのことが子どもたちの学習意欲をそぎ落としているということになっている。

また、塾に来ている子どもたちから、言語と実感の一致が見られないことがあることを感じる。たとえば、「親戚」ということが彼らの生活実感から感じ取れないのである。そのような子どもたちの現状を把握しながら学校自体が変革して行かなくてはならない。

〈討議の様子〉

内申点制度をやめ、高校に進学可能な学力の状況になつてから高校へ進学するようにしてはいいのではないかと、という問いかけに対して、内申点がなくなつても現状はあまり変わらないのではないかとということが議論になつた。

子ども達の健全な成長を励ます入試制度のあり方についてさらに議論を深める必要がある。

報告5 「小中連携」の実践と教育課程

江差北中学校 石橋 英敏

〈概要〉

町教委の構想の下に始まった江差北小学校と江差北中学校の「小中連携」。毎週一回合同で会議を開催しながら具体的にどのように「連携」をしていったらよいかを議論している。中学校の教職員は前向きな議論になるのであるが、

小学校の教職員はそれほどでもない現状がある。小中乗り入れ授業や授業参観の交流等があるが、子どもたちの成長を励ますためにもっと効果的な方法がないかを模索中である。

〈討議の様子〉

全国的には「中高一貫教育」から「小中一貫教育」へと軸足が移っているが、そのことと報告で示す「小中連携」の目ざすところの相違点を改めて見つめ直す必要がある。

また、小中併置校との違いも明確にすることも大切なのではないか。

道内においての中高一貫（連携）は、地方の高校を残すための方策の一つであった。過疎地対策とも言え、登別明日高校の中高一貫と思想も手段も違うことを押さえるべきである。

小と中の教員が2年間、週一度合同会議を設け議論してきたことで、だんだんとその溝が埋まってきたことがうかがえた。

小と中が研究テーマを同じにしながら研究を前進させることができないうか。

報告6 ふるさとに学ぶ産業教育

Ⅱ 21世紀をたくましく生きる心と力の育成を願ってⅡ

宗谷中学校 牧野 武博

〈概要〉

全校生徒28人の宗谷中学校の校区は水産業を生業にしている人が多い。10年前から始めたホタテやたこの薫製づくりは教育課程に組み込まれながら本校の看板的な教育活動になっていく。学校祭では薫製づくりについて地域の人たちに報告したり、修学旅行では札幌駅のコンコースで製品を販売もした。今年は、製品紹介のプロモーションビデオを生徒が制作。地域の産業と教育活動の深い結びつきは、地域の人たちが学校への信頼を強めるとともに生徒の活動が地域の人たちを励ましている。

〈討議の様子〉

中学校でこれだけの取り組みができていくということに驚きを持って聞いていた。高校の水産科と総合学科の特質を併せ持ったものか、それ以上の意味合いを感じ取ったからだ。

「薫製」一つとっても、それを数学、理科、美術、社会など、各教科の特質から迫ることがより「総合的」な学びをつく

り出すことになる。

社会の状況と保護者の職業のもつ課題を学びの材料にするのであれば、T P Pの問題も避けて通れないのではないのか。

討議の柱Ⅰ

中学・高校における「学び」をより深めるために

*子どもたちの興味関心を重視した授業と、系統性を重視した授業のバランスをどのようにとっていったらよいか

単位制高校では授業の半数が選択科目であり、学習集団と生活集団が分離してしまっている。

選択科目を芸術や体育とすることもよいが、目標のない生徒は苦勞しないものに流れがちである。単位制高校は自律的な生活をできる生徒にはよいが、輪切りで「しかたなく」入学した生徒は低きに流れやすい傾向にある。単位制を、「選択」という名の「自己責任」にしてはならない。

そう言う意味では、科目選択を生徒まかせにするのではなく、このくらいは学んだ方がよいということを一定程度学校側が示す必要があると考える。

学びにおける集団。それは関係性を学べるところでなくてはならない。集団の質についても問い直さなくてはならないということである。小学6年生が「学校に行くのはトラブルがあるからだ」と言った。トラブルを解決することが「学び」を深めるとともに、生きる意味を問い直すことになるという実感を小学生なりに感じ取った表現なのではないか。そのためには何を言っても良いという「安心」が必要で、それがあがることで学習も生活も安定していくものだ。

討議の柱Ⅱ 地域に根ざす教育活動のあり方について

* 学び・生活・労働を関連づけながら、「何のために学ぶのか」を握ってはなさない教育活動のあり方

宗谷中学校では認め合える集団づくりの中で子ども達が生き生きと活動していった。水産タイム発表会では地域の人達が多数集まり、子ども達が真剣に活動している姿を目の当たりにした地域の人達を励ますことになっているのも事実である。

檜山では以前から「ふるさと学習」に取り組んできた。宗谷の地域に根ざす教育実践に通底するものである。しかし、農林水産業が衰退する地方において、地域を学ぶこと

が子ども達から希望を失わせることにならないかが懸念される。何をどのように学ばさせるか。大きな検討を要する。

討議の柱Ⅲ 小中一貫校のめざすもの

江差追分について小学校と中学校で発達段階に合わせて学ぶことは江差ならではのことである。そのことで子ども達にとつて地域に生きることの意味を感じ取り、自分のふるさとを再認識する学びをつくり出していることになっているか、さらに研究を進めることが大切である。

算数・数学のカリキュラムの一貫も研究の一つとして据えてみることもいいのではないか。

討議の柱Ⅳ 子どもたちの言語と認識の現状

「言葉がない」子ども達は自ずと認識も皮相なものになってしまふ。荒れる中学生を相手に読み聞かせをしたら、暴力・シンナーをやめたという事実がある。自分の内なるものを言語で認識できないために、感情にかまけた行動をとらせていると言える。子ども達の安定した精神状態をつくるためには、学校でも家庭でも豊かな言語環境が必要である。

〈共同研究者のまとめ〉

単位制高校では選択教科が豊富にあり必然的に少人数となり学級集団も解体されることになる。しかし、学習集団と生活集団が同じ方が安心の度合いが増し、学習の効果もあがるのではないだろうか。

地域に根ざした教育は現代の課題にも結びつけられ子ども達の学びにも深まりが出てくる。例えば国政上の焦眉の課題となっているTTP問題。このことも宗谷中の教育活動の中で水産業がTTPから受ける被害についても学習材料にできないであろうか。

「一貫教育」では、小中を串刺しにして本質的に学ぶべきことは何かを探らなくてはならない。そのためには幼保との連携も必要となる。